

[説教]

## 平和の使者

エーバーハルト・ブッシュ

そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。イエスは重ねて言われた、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい！」(ヨハネによる福音書 20 章 19～22 節)

驚くことに、「イエスは彼らに息を吹きかけられる」。何かが彼から出て行く。何かが彼らのところに来る。彼の息は長くつづく。それによって彼は彼らのところに赴く。彼は一つの大気を広げ、その中に彼らを引き入れる。彼は彼らの真ん中に立たれる。彼らが彼をそこに立たせたのではない。そこに彼自ら立たれ、それによって彼らは彼の周辺になったのだ。そして今や一つの運動が、この中心から彼の周辺へ、彼から彼らのところへ、彼の口から彼らの顔に向けて起こる。そう、彼らの中に入って行く。見えないけれどもそれは力をもって働く。この運動、これが聖霊にほかならない。神は聖霊においてわれわれのところに来る。だれもつかむことのできない彼が、である——「だれが彼を名をもって呼ぶことが許されようか。そしてだれが告白できようか……」(ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ)——その方が聖霊においてわれわれのところ近づいて来る。したがってこの方はわれわれのだれからも遠くない。何らかの神が、というのではない。この方が、すなわち、すでに到来したもうたこの方が、来られる。彼の到来はその心からのものだ。その心が愛に満ちていることは、クリスマスにおいて、受難の日において、イースターの日において明らかである。しかし彼はただあの時あそこに来られたということではない。聖霊によって彼は今ここにいまし、われわれに息を吹きかけ、われわれに関わり、われわれの心情に訴える。

彼とわれわれの間にはたしかに裂け目がある。「醜悪な溝」(レッシング) のようなものがある。聖なる神と聖ならざるものとの間に、神の言葉、神の福音、神の誠命とわれわれここにいる者たちとの間にある。聖書の時代と空間とわれわれにとっての今日との間に溝

がある。どのようにして私はそれを自分にあてはめることができるのか？ それは私とどんな関係があるのか？ 私は何をもって始めるべきなのか？ 「私はメッセージを耳にする。ただ私には信仰が欠けているだけなのだ」とゲーテのファウスト博士は語る！ 気持が高まったり落ち込んだり、無関心になったり忘却したり、反逆的になったり懐疑的になったり、こうしたことの前にわれわれは立っている。いずれにせよ溝がある。しかしわれわれに約束された霊は、溝への架橋、分裂のいやし、あちらからこちらへの神の運動である。こうした運動がなければ、神の霊がなければ、われわれは、神の前に、神の世界の前に、まるで閉じられた扉の前にいるように立っていることとなる。神の霊がなければわれわれはわれわれがそれについて何も知らないということすらまったく知ることはないし、高貴な者についておそらく夢を見るときもそれはただ夢を見るだけにすぎないのだということもまったく知ることはない。そして少なからざる人はあれこれ素人療法を試み、そして言う、ひたすら楽しんで夢を見なさいと。しかしこの運動が、すなわち神の霊が、われわれを見いだすときに、人間は目となり耳となり、神に対する、神の言葉に対する、神のキリストに対する心と感性を獲得する。その時人間は信仰に至るために夢から目覚させられるのだ。そしてその時人は、聖霊を信ずることの意味が、「自分の理性や能力によっては、私の主イエス・キリストを信じることも、みもとに来ることもできないことを、私は信じます」（ルター『小教理問答書』）ということだということを理解する。そこへとだれも自分で行くことはできない。人がヨーロッパの文化の中で育ったからといって行けるということでもない。そこへと行くことができるのはただ神の霊によってだけである、すなわち、神ご自身がそのために配慮してくださることによってである。そこへとわれわれはただ神がわれわれのところに来てくださることによってしか行くことができない。われわれがとらえることによってではない、そうではなくてわれわれがとらえられることによってしか行くことはできないのである。

むろん人間は様々なものにとらえられる。多くの霊、多くの運動が存在し、それらがわれわれを満たし、鼓舞し、幸福にし、有頂天にさせ、強制的に引張っていく。水準が低いか高いかは問題ではない。それだけでない、ある学者によれば今やわれわれは何らかの仕方で新しく起こったパラダイムシフト〔転換〕によって霊の時代に入ったのである。なぜそうでないことがあるのか！ もしそうであるなら、われわれは喜ぼう！ ただ次のことだけは明らかでなければならぬ。すなわち、われわれが霊について語ることだけではまだそれをもっていることにならないということである。そう、まさに、種々の霊が存在する。全部が全部邪悪なわけではない。しかしまた全部が全部聖霊なのでもない。それら

をわれわれが神的なものとして受け取る時には、そうではない。われわれの周りでそれがどのように説き聞かせられようとも、ヨハネによる福音書にとって聖霊降臨とは復活節後50日たってはじめて始まるのではない。それはすでに復活節の出来事において、復活した方との出会いの中で始まる。それゆえ聖霊降臨は生けるキリストの現れに対してまったく違った時間が始まるということではない。それはその現れにつづく現れである。聖霊によってわれわれに息を吹きかけたもうのは生けるキリストなのである。聖霊は彼の口から出て行く。聖霊はわれわれをキリストに近づけ、われわれを彼のところへ、彼の福音へ、彼の和解へ、彼の平和へ、彼の飼う葉桶へ、彼の十字架へと導くということ以外の何もわれわれにもたらさない。この霊が聖なる霊である。キリストと並んで、またキリスト以外に何か他のものを、あるいはもっとよいと称されるものを、必要な補いと称されるものを強く勧める霊、それはみな聖ではない。ルターは次のように言っている、「悪魔殿、ここで大事なのはつぎはぎをしたりすることでも烙印を押ししたりすることでもない。そうではなくて眼鏡をかけてしっかり見ることだ。聖霊は、主キリストの言葉を、キリスト教徒に教えるという務めをもっていなければならない。いま一人の人が来て、何かを私に聖霊によって啓示されたものとして提示するならば、私はこの言葉を頼りとする。それがキリストの語っていることと一致するならば、私はそれを正しいとする。しかしそれが何か違ったものを造り出そうとするならば、そのとき私は言う、君は聖霊ではない、そうではなくて嫌悪すべき悪魔だと。というのも聖霊はがらくたやペテンをもたらすのではなく、大いに真剣な事柄を、すなわち、キリストをその賜物とともにもたらすのだから」。

それがわれわれにもたらすものは何であろうか。もう一度「イエスは彼らに息を吹きかけた」という言葉に注意してみよう！ヨハネはここでもう一つ別の出来事に出てくる言い回しを使っている。それをわれわれは思い起こす。聖書に、最初の人間の創造についてこう書かれている、「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」（創世記2・7）。この素朴で具体的な叙述の中に知恵が隠れている。人間は塵であり不格好なものだということである。「お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3・19）。神が彼に息を吹き入れなければ彼は自ら崩壊する。しかしもし彼が生きるならば、もし彼が地から立ち上がるとすれば、それは神が彼に息を吹きつけ、呼吸と命と魂を吹き入れてくださるゆえにである。つまりそれが人間である、すなわち、生ける存在である。しかし生きているのは呼吸する度に神から生きているのである。それは生きている存在がそれに気がつくどうか、それに感謝するかどうか、には関わりがない。復活節に甦った方が彼の周りの人々に息を吹きかけることにおいて彼は創造者が彼

の被造物に息を吹きかけることを受け継ぐ。それによって彼は自らを生きている者らの友として示す。それによって彼は周りの人々に「生への畏敬」(シュヴァイツァー)を吹き込む。いやそれ以上である。それによって彼自身創造的である。すなわち、新しい人間の、その新しい人間の創造者である。そのことが彼には可能である。というのも、真ん中に来た方は、死と墓から彼らの間に来られた方、すなわち、われわれのように、われわれと共に、それだけでなくわれわれのために死に身をさらされた生ける方であるから。この方について復活節の日に神はこう判定された、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者、これに聞け」(マタイ 17・5)。今この方が自ら彼らにこう語りたもう、「一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」(ヨハネ黙示録 1・18)。そしてまたこの方は今語りたもう、「わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」(ヨハネ 14・19)。

なぜ「われわれも」生きることになるのだろうか。国民歌をもって言うならば「まだランプが赤々とついているかぎり」、本当にわれわれは今生きるいるのだから。その通り、しかしイエスがわれわれに息を吹きかけられ、そしてわれわれにこう言いたもうのである、あなたたちが生きているその命は命ではないと。あなたたちはあなたたちの肺のために今とは別の息が必要なのだと。あなたたちに必要なのは聖霊である。そしてもしあなたたちがそれを持っていないとすれば、たとえあなたたちがあちこち活発に駆けずり回り、創造し、少しでもあなたたちの自然の生活を楽しんでいるとしても、じつのところあなたたちは命とは無関係に生きているのである。それだけでなくその時にはあなたたちは死んでいるのだ。それはちょうど父のもとを遠く離れていった放蕩息子がそうであったように。彼は華やかに嬉々として生活したのについては悪の泥沼にはまり込んだ(ルカ 15・24)。その時あなたがたは、エルンスト・ヴィーヘルトが彼の刺激的な物語、人使いの荒い元気すぎる人の物語で言っている遍歴死体のようなものに等しい。人はパンだけで生きるのではない。空気だけで生きるのではない。彼は神の言葉を、神の霊を必要としている。そうでなければ彼の生は失われており、滅びかけている。なぜなら彼は「命の泉」(詩編 36・10)であるものから切り離されているからである。もし彼が全世界を手に入れたとしても、外面的な呼吸をしつつ、成功と尊敬を勝ち得たとしても、それが人間に何の役に立つのだろうか。彼については、次の預言者の言葉があてはまる、「彼らは生ける水の源であるわたしを捨てた」(エレミヤ 2・13)。しかし生ける方が人間に息を吹きかけて、聖霊を受けなさいと言うとすれば、それはなんということだろうか！ かくて彼らは命の泉である方と関わりをもつようになる。甦りたもうた方の約束が彼らにおいて成就される。「わたし

が生きているので、あなたがたも生きることになる」。その時彼らについてこう言われる、「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(2コリント5・17)。また彼らに対してこう言われる、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ11・25)。というのも、その時に、神との彼らの結びつきは、彼らの地上的生以上にもっとリアルであるから。その時、その神との結びつきは、彼の手から、何ものをも、彼らの地上の終わりすらも奪い取ることをしないであろう。人が全世界を失うとも、彼が神を失うことはもはやありえない。「わたしの肉もわたしの心も朽ちるであろうが、神はとこしえにわたしの心の岩」(詩編73・26)。

神の霊はこのような生き物を創造し、やがていつかではなく、今もすでに、ふつう生活と称されているものの只中で覚醒させたもう、すなわち、しばしばまったく弱く不確かで、欠陥があり試みを受けており、人を傷つけた傷つきやすく、無気力で怠惰、絶望し落胆し時にただ悲しんでいる、そうした人間を覚醒させたもう。彼らはこう考える、あらゆる前線で停滞していると。多くのものが衰退の中にある。私が試みたことも最高ではなかった、為されたけれども空しかった。断念すべきではないのだろうか。意気阻喪してならないのだろうか。しかしキリストがわれわれに「聖霊を受けよ!」と語られる時、大きな約束がふたたびわれわれをとらえる、すなわち「わたしはすべての人にわが霊を注ぐ」(ヨエル3・1)。われわれは、立ち上がり、頭を上げ、力を与えられる、思慮深さのための、次の一步のための勇気を与えられる。われわれは新鮮な風のようなものを経験する、風のあとにふたたび帆をあげる。目に見えなくとも感じられる風がある時はやさしくある時は嵐のように顔に吹きつける。ある時は刺激的である時はかきみだす。その風はある時はわれわれをさわやかにし、ある時はわれわれを激しくゆさぶる。ある時はそれは前へと進む。ある時は留まる。われわれを悔改めへと、新たな求道へと導く。諺にあるように「君は挽き臼にしたがって風をまわすことはできない」。人は風を操ることはできない。しかし風は人を動かすことができる。聖霊も風のようなものだ。それはただ運動に過ぎないのではない。それは運動を引き起こす。たちまちにもしかしたら心配事が起こってこの運動をコントロールし古くからの枠組みの中に入れようとするのがあっても。それに対して聖書は言う、「霊の火を消してはいけません!」。言い換えれば、マリオ・フォン・ガリが言うように、聖霊は消化器ではない、それは放火犯人だ。聖霊は人間に火をつける。

何のために? われわれはイエスの言葉に注意しよう。「聖霊を受けなさい!」。「受けなさい [取りなさい]」——この言葉は、少し前に、聖金曜日の晩に、イエスがパンと葡萄酒を与えたとき弟子たちに向かって語られたと同じ言葉を思い起こさせる。「取って食べ

なさい。これはわたしの体である。これはわたしの血である」——あなたたちのために裂かれた、あなたたちのために流された。そこから罪の赦しを、悪に対する強さを受けなさい（マタイ 26・26～28）。神があなたたちのために御子を犠牲にして与えてくださったものから平和と慰めと自由を受けなさい。受けなさい！ それは聖金曜日の前夜重荷を負って苦勞している者たちへ、赦しと救いを必要としている者たちへ語られた言葉である。今また救いが彼らに約束される。そして今、生ける方が復活して顕現し再び語られる、受けなさい！ 「聖霊を受けなさい」と。この二度目の「受けなさい！」は、神の子らに対して語られている。依然として重荷を負って苦勞しているが、しかし赦しが約束されている、彼の約束へ向けて立ち上がることの許されている者たちに対して語られている。神の恵みの食卓にあずかって強くされた人たちに対して語られている。この二度目の「受けなさい！」は彼らを勇気づけ、今や彼らを立たせ、日曜日の礼拝からこの世における毎日の生活の中での礼拝へと向かわせる。ある説教者はこう言っている、「聖金曜日の賜物はわれわれをこの世から神へと向き直させる、聖霊降臨日の賜物はわれわれを神からこの世へと、兄弟へと、姉妹へと、近くの義務へと向き直させる」（ヴァルター・リュティ）。「聖霊を受けなさい！」。というも聖霊があなたがたに与えられることによって神の道はその終わりまで行き着いたというわけではないのだから。今やまさにあなたがたはその道へと導かれているということであろう。

イエスは言う、「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わす」。聖霊を私は個人的に使うために受けることはできない。聖霊を受けることと使命を与えられることは同一メダルの表と裏のように関連し合っている。ルカによればイエスの聖霊の約束はこうである、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、わたしの証人となる」（使徒 1・8）。あなたがたはそうでなければならないというのではない。そうではなくてあなたがたはそうなるであろう。聖霊を受ける人は、自分が証人であろうとするのか、しないのか、選ぶことはできない。彼が聖霊を受けるならば、彼がキリストの使者であるのは自明であろう。雷鳴が閃光につづくように。どうしてそうでないことがあろうか。彼がそのようにしてそれに対する信仰へと覚醒される神は、まずもって、ご自身、大いなる運動の中でとらえられる。つまり、彼がそのみ子を世に遣わすまでに世を愛したもうその運動の中で。また彼の霊があの時あのところからここで今われわれのもとにやってくる運動の中で。どうしてこの運動は私において止まってしまうことがあるだろうか。この運動は、私をもその運動の中に引き入れる、そして私も私をあの遣わされた者の一人としてその運動の中で一緒に運動するというのと別の仕方で私に届くことはどうして

ありえようか。聖霊を受ける人は彼のほうでも派遣される——彼が慣れ親しんだ圏域を出て、われわれの確固たる支えを欠いた、仮借のない、辛辣な、悪趣味なこの世へと派遣される。神はこの世を諦めてはおられないし、またまずもってわれわれがこの世を救いわなければならないというのではない。なぜなら救い主がこの世のためにすでにお生まれになったのだから。そのことを証しすることがわれわれの派遣である。聖霊が関わりをもつてくださることがわれわれがその証しのための派遣に備えることであり、そのためにわれわれが鼓舞されることである。

イエスは言う、「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わす」。父はどのようにイエスを遣わしたのであるだろうか。彼は来て真ん中に立ち、言った、「あなたがたに平和があるように！」と。このメッセージをもってイエスは彼らを彼らの周辺の世界へ、彼らを取り囲む世界へ遣わす。というのもそれが命、新しい命であるから、すなわち、命の泉である方から切り離されておらず、それと結びついている命、生ける方がわれわれに吹き入れる命——それは復活節の挨拶の中にある命、互いに相手なしに、互いに対立している中ではない命、そうではなくて共に、お互いのためにある中にある命、平和の中の命——神との、身近にいる人との、近い、遠い、喜んでいる、泣いている、善い、悪い人たちとの平和の中にある命。復活節の平和の挨拶を伝えよ、そして平和に生きなさい。それゆえあなたたちと偶然に行き会う人の中にあなたたちの隣人を見いだしなさい。彼らにもっと近づきなさい、しかし近づきすぎてはならない——あなたたちの観念や自分の意見やらをもって。彼らのための口となり耳となりなさい。繊細な感覚をもって心となり手となりなさい。彼らがあなたたちと別の考えを持っているとしても背を向けてはならない。忍耐し彼らと共に彼らの重荷を負いなさい。彼らのために、彼らと共に、彼らのために救い主が生きたもうことを喜びなさい。彼らが見捨てられていないこと、それゆえ彼ら自身も自分を見捨ててはならないこと、彼らが重要なのだということ、用のない人間などではないのだということを彼らに知らせてあげなさい。だれもが何かしらの仕方をつけているマスクの背後に目を注ぎなさい。その背後に人間を見、彼を真剣に受け取り、敬い、愛するためである。この人間を軽視し辱めるものには否と言いなさい。どんなに救いのない否の中でも然りを言いなさい。この然りはつくり上げ、先に進ませる。こうして私は、聖霊の力によって伝えるべく託されている証しを伝える。その証しとは、「私が信じるときにまた信じることによって私の隣人に対してなす挨拶のことであり、その人において私がイエス・キリストの一人の兄弟、一人の姉妹、それゆえ私自身の兄弟、私自身の姉妹を見いだすことを期待する隣人との私の交わりの告知のことである」(カール・バルト)。その挨拶

掬は生ける方がわれわれに息を吹きかけることによってわれわれの唇にのぼせてくださるものである。そしてそれによってわれわれは、成人として、彼の口まねをし、こうくり返す、「あなたがたに平和があるように」。

(佐藤司郎訳)

[エーバーハルト・ブッシュ氏はゲッティンゲン大学神学部名誉教授。本号のために説教を寄せてくださった]